

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地域の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として気象庁が委嘱した方です。



Yoshiaki Yano

カスリーン台風

私たちはどこに住んでいても、その土地の災害リスクを把握しておくことは重要なことです。これには先ずハザードマップなどでの確認が必須ですが、同時に過去にどのような災害が発生し、どういう状況だったのかを知ることも重要です。

葛飾で発生した大きな災害と言えば、何と云っても 1947 年 9 月のカスリーン台風による洪水です。余談ですが、“カスリーン”とは女性の名前で、綴りは“Kathleen”ですので、“キャサリン”と呼ぶこともできます。なぜ女性の名前が付いているのでしょうか。戦後しばらく、日本はアメリカ軍を中心とした連合軍の占領下にあり、台風の名前にはアメリカ合衆国と同様に女性の呼び名が付けられていました。

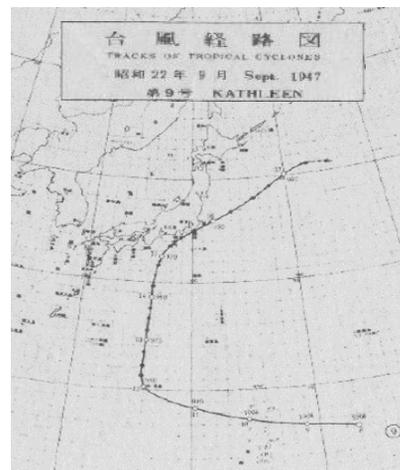
カスリーン台風によって利根川や荒川などの堤防が決壊、埼玉県東部から東京都 23 区東部にかけての広い地域が浸水し、死者・行方不明は 1,930 人、住家損壊 9298 棟、浸水 384,743 棟、罹災者は 40 万人余り、甚大な被害になってしまいました。

歴史に残る洪水をもたらしたからには、途轍もない台風が襲ったと思っている方も多いのではないのでしょうか。観測事実は、台風が最発達していたと見られる鳥島付近での最低気圧は 960hPa、最大風速は 45m/s との記録があり、その後勢力を弱めながら遠州灘沖合を北東に進み、伊豆大島付近を通過しています。伊豆大島での最低気圧は 986.4hPa、最大風速は北北東 20.0m/s で、台風の勢力としてはさして特別のものではないことが窺えます。実際、強風による被害はさほど残されていません。

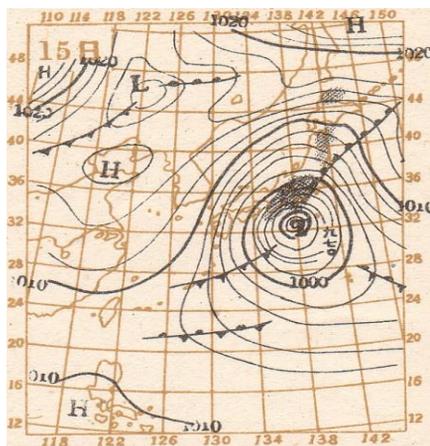
当時の気象観測体制から台風周辺の気象構造を詳しく述べることはできませんが、左の天気図が示すように台風の北側には前線があったようです。この前線や秩父山地・足尾山地に台風が吹き付ける気流が豪雨を降らせ、後世の私たちに語り継がれる大洪水を引き起こしました。9月15日に秩父では 563.4mm、前橋では 367.4mm の 24 時間降水量の記録が残されていて、未だに観測史上第 1 位を保っています。

台風が、水蒸気を大量に含んだ暖かい気流を前線や山地に吹き付け、豪雨をもたらすことは今日でもよく起きることで

す。台風が接近して来るときは、台風の規模や強さについて注目するのは当然ですが、台風の進路前方付近に前線や大きく広がる南東斜面があれば更に注意が必要です。大河川が流れる葛飾区などでは、上流域の雨の降り方についても注目が必要で、発表される防災気象情報の活用とその内容についても留意をお願いしたいと思います。



出典：気象庁ホームページ
主要部分を筆者切り出し加工



天気図 1947年9月15日03時
出典：気象庁ホームページ

問い合わせ先
危機管理課災害対策係 電話 2274

令和3年8月12日
危機管理課発行